

明代の福建漳州府における宗族の形成

——龍溪県の白石丁氏をめぐって——

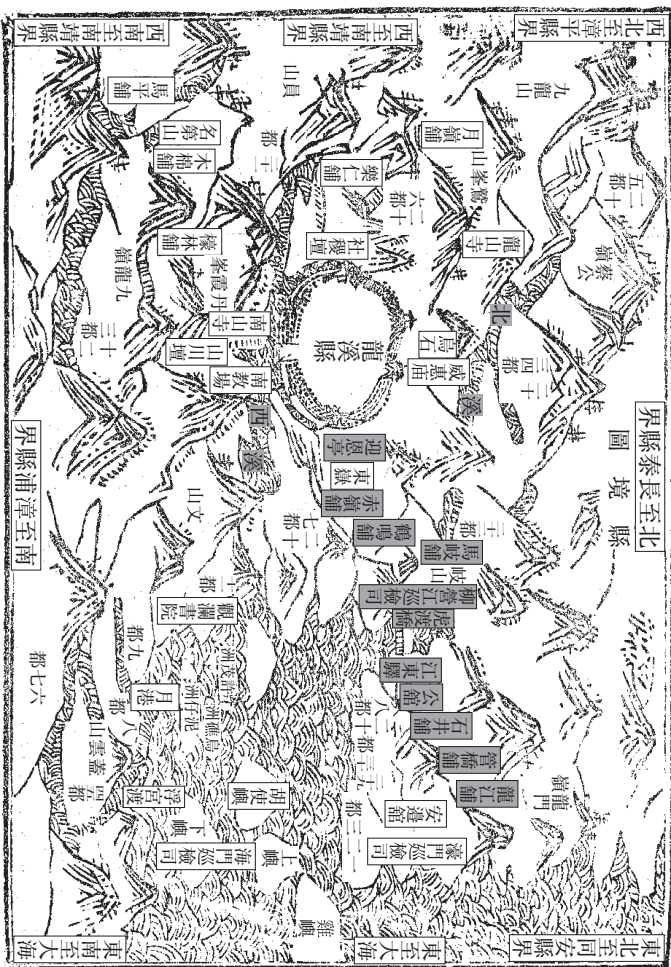
亀岡 敦子

はじめに

本稿は、福建漳州府龍溪県二十九三十都白石社の丁氏一族とその族譜を取り上げること、閩南（福建南部）の宗族の形成と発展の過程において、祖先の歴史を族譜に記録することが、その宗族にとって如何なる意味を持ったのか、検討を試みるものである。

漳州府龍溪県二十九三十都は漳州府城の東六〇里に位置し、白石社は当該都に属する一五の「社」の一つである（龍溪県各都の配置については「図—1」参照⁽¹⁾）。本稿で分析の対象とする白石丁氏の族譜『白石丁氏古譜』（以下、本稿では『古譜』と称す）は清嘉慶二年（一七九七）の編纂である。しかし、『古譜』に収められた歴代族譜の「序」には、元代を起点として丁氏が数回にわたって族譜の編纂を行なったことが述べられている。そして丁氏はこれらの「序」において、唐代にまで遡るといふ一族の歴史を叙述している。それによれば、丁氏の始遷祖は唐代の九承事郎（丁儒、字字道）で、漳州の象山に居住していた。⁽³⁾この頃から当該地域の開発に努め、経済的に豊かな者は進んで土地

【図一】 嘉清『龍溪県志』巻首、「県境図」（筆者が一部加工・加筆）



註：北溪・西溪は筆者による加筆。■は東路上の施設を指す。

を寄附して公共事業を興し、郷里の人々の生活に貢献したという。その後、子孫は文峰畝中に移住・定着した。⁽⁴⁾南宋時代には慶元五年（一一九九）の「特奏名進士」九世丁知幾を出し、また一方で地域の社会基盤の整備にも携わり、地域の名士として郷里の人々から敬われていたという。これらの記述の真偽は定かではないが、丁氏一族自身はそう主張し、九承事郎を「始祖承事郎」、丁知幾を「郷賢丁知幾」と呼んで、地域社会における威信の象徴としていた。

始祖承事郎の来歴については、明末までには、唐代の漳州の開拓者・創始者であり、初代刺史とされ後に地方神として祀られた陳元光をめぐる〈陳元光遠征随伴伝承〉と結びつけて語られるようになった。⁽⁵⁾『古譜』内に叙述された当該伝承は、崇禎『漳州府志』と崇禎『閩書』に採録されたことで、公認の「史実」として漳州人が共有するようになったのである。⁽⁶⁾しかし、龍溪県内宗族の族譜では少なからず祖先が陳元光の武將として随伴して入閩したと叙述されているのに対して、『古譜』は、始祖承事郎の入閩時期を陳元光のそれより前に設定し、陳元光以前から漳州において「蜚」を平定し、当地の開拓に貢献していたと主張している点の特徴である。⁽⁷⁾

明末の万暦年間には丁知幾が龍溪県郷賢祠に配祀され、次いで崇禎・康熙年間には丁儒が漳州府名宦祠に配祀された。⁽⁸⁾清初、福建沿海部に遷界令が出されると、界外に存在した丁氏の祠堂が他姓宗族によって占拠され、遷界令解除後に丁氏がこれを漳州府衙門に訴える事件があった。⁽⁹⁾それ以来、百年近くに渡って他姓宗族との訴訟が続いた。南靖県学生員であった二五世丁中駒が恩例歳貢となると、乾隆十八年（二七五三）に、丁儒と丁知幾を祀る「名宦郷賢祠」を「復興」させ、祠堂の土地を奪還した。⁽¹⁰⁾その過程で、族譜における宗族の歴史叙述は、彼らの諸権利を

正当化する根拠となり得たと思われる。族譜の編纂が行われる背景には、名誉欲や族人共通の利害・対抗意識が存在する。宗族の歴史が族譜に記述されるのは、それによつて宗族が社会的地位獲得を図るからであろう。⁽¹¹⁾

『古譜』には、唐代の始祖から清代の二八世までの主要な族人の伝を集めた「白石丁氏懿蹟紀」(以下、「懿蹟紀」と称す)が収録されている。ここには、明末を生きた二一世丁太瑩・二二世丁楸已や明清交替期に活動した二四世丁世勲による考察が附されている。丁太瑩と丁楸已は崇禎五年(一六三二)の族譜編纂時に、先人の記録を蒐集して「簪纓世徳」「儒林伝」および「言行録」を編纂し、それらを丁世勲が順治十三年(一六五六)に整理して「近事」を加え、「懿蹟紀」として族譜に収めたのである。⁽¹²⁾従つて「懿蹟紀」所収の伝は、彼らの解釈が加わり、彼らの生きた時代の宗族の社会的状況に合わせて編纂された可能性がある。特に康熙年間以降の族譜編纂では、上述した訴訟への対応のために、創作・附会も含めた様々なレヴェルの改変や情報の取捨選択がなされた可能性もある。一方で、『古譜』の記載内容すべてが後世に附加された言説であるとも言い難い。本稿では、『古譜』の記載に対して詳細な検討を加えることで、丁氏にとつて、祖先の歴史を主張することには如何なる意味があり、どのような事柄が族譜に記録するに値すると見なされていたのか、九承事郎と丁知幾はなぜ丁氏の祖先として一族の結集力を維持するための威信の源泉となったのかを解明し、記述の真偽の判定については一旦保留しつつ、丁氏がどのような宗族形成の過程を辿ったと考えられるのか、時代背景も含めて考察したい。

福建の宗族に関する先駆的な研究として、傅衣凌は、一地域に集住する地縁に基づいた同族結合として〈郷族〉という用語を提示し、明清時代の福建・江西・広東などの華南農村社会に存在した〈郷族〉が、当該社会の様々な

側面において果たした役割について実証的に検討した。⁽¹³⁾ 陳支平と鄭振滿は、いずれも民間に残る史料を豊富に用いて、福建という地域の地理的環境、社会・経済さらには国家の統治機構およびイデオロギーの歴史的変遷に即して、宗族の形成・発展過程を論じている。⁽¹⁴⁾ 特に、鄭振滿は、明代中葉以降、里甲制が変質し、里甲戸籍の世襲化、賦役の定額化が見られる中で、宗族組織は族人間で賦役を分担するために一族全体の人丁・家産を管理して基層社会で「政権的機能」を果たすようになり、それが宗族の形成と発展を促したという。また一方で、宗法の「庶民化」という独自の概念を用い、宗族形成は『朱子家礼』に代表される宋明時代の理学倫理が地域社会に浸透する過程であると指摘した。⁽¹⁵⁾ 明清時代の福建地域社会を理解する上で、宗族が重要な鍵となることは明らかであるが、これらの研究では宋代以降の宗族形成の重要な一要素である族譜（編纂）における編纂者の意図については十分な検討がなされていない。⁽¹⁶⁾

これに対して、近年では福建各地域の宗族についてより微視的な研究が行われるようになってきている。福州府南台島の宗族を取り上げたM・スゾーニや、汀州府の宗族社会を論じた劉永華の研究はその一例である。両者ともに明朝の諸制度、儒教文化、道教文化と地方文化の関係性および地方における文化的変容の過程を論じる中で、族譜の編纂による自己の歴史の再構成、周縁におけるエスニシティの問題にも言及した。⁽¹⁷⁾ しかしながら、族譜の編纂と叙述が、現実の社会生活の上で果たした機能には論究していない。

他方、族譜の叙述に関する研究として、対象とする地域は異なるものの、人類学者の瀬川昌久が、香港新界の村落と宗族について行った一連の研究も注目される。すなわち瀬川は、族譜の仮構性に着目してその編纂過程を詳細

に分析し、宗族結合およびその背後にある歴史意識について解明した。また珠江デルタ社会を研究する片山剛は、当該地域の宗族の族譜における言説の特徴に焦点をあて、それがあつた種の社会的身分証明のために意図的に示されていることを、当該地域の歴史的背景に即して明らかにした。⁽¹⁸⁾

漳州府ひいては閩南地域社会の研究においても、これら研究の視点は有効であらうと思われる。漳州府は福建と広東の境界に位置し、客家人を含む漢族と非漢族（しばしば「畬」として言及される）という多様な文化的背景を持つた人々が雑居している。王朝末期の社会混乱時には山地を中心として「山寇」が活発化し、それは民衆反乱史の文脈においても取り上げられてきた。⁽¹⁹⁾〈陳元光遠征随伴伝承〉はそのような漳州府の社会・文化の歴史的変遷と大きくかわる移住伝承であるが、これまで学術的にはあまり注目されてこなかったように思われる。『古譜』は、漳州府における〈陳元光遠征随伴伝承〉の成立・普及と深くかわり、現代でも陳元光の実在性とその事蹟の真実性を示す重要な「証拠」として、漳州地区の新編地方志や郷土史家による研究でも紹介されているが、その内容を詳細に読み解いた研究は管見の限りでは見あたらないのである。⁽²⁰⁾

以上の点をふまえ、本稿では、白石丁氏の『古譜』を読み解き、彼らが漳州府社会の歴史的変遷のもとで形成してきた自己認識、すなわち始祖承事郎と郷賢丁知幾に関する言説を如何に語り、利用したのかを明らかにしたい。これは、ひいては、〈陳元光遠征随伴伝承〉、漳州府の「地方史」、漳州人全体の自己認識形成の解明に繋がるであろう。

第一章 白石丁氏の族的統合と祠堂の建設

『古譜』によれば、丁氏が宗族として結集し始めたのは明代中期以降であるという。その過程で、とりわけ、正徳七年（一五二二）に文峰畝中に建設された祠堂（以下、文峰畝中祠堂と称す）は丁氏の団結を維持し、地域社会に一族の威光を示す上で重要な装置であったと認識されていた。本章では、丁氏自身が、文峰畝中祠堂の建設にどのような意義を見出していたのかを検討したい。

一九世丁嘉言が嘉靖十年（一五三二）に執筆した「文峰丁氏祠堂記」には、以下のように記述されている。

古くは、住居を造るのに必ず先に祠堂を立て、そうして先祖の御霊を安らかにした。高・曾・祖・考は当然あるべき位置をもつて祀り、夏春夏秋冬の祭祀は季節ごとに行われ、昭穆は順序だてられ、勸善懲悪は明らかにされる。我が始祖は象山に定住し、ここから一族を創始し、子孫のためのはかりごとを行い、あらゆる事を始めた。三世祖十七郎ははじめて家廟を建てた。石柱二十四本を立て、地面に磚を敷き、垣根を塗り、正寝から庭にいたるまで規制は壮麗であった。兵火で焼けた後、数世代を経て、畝中に重建しようとしたが、難しかった。（中略）正徳七年の冬至の会で、一九世孫澄源公が首唱して「祠堂を興して運営できる者がいるならば、私がまず銀二〇両を出そう」と言った。一八世孫盤林の発言は、どれもがきわめて重要であったが、継いで「承事郎の子孫であれば、このように「立派な行いが」できるものだ。あらゆる資金「繰り」については、私が担当しよう」と言った。迪功郎の玄孫雅侃らは一族の長老であったが、三使公の祭田の余剰銀二十両をこれに副え

た。南園公遊峰の子庸佩らは、それぞれ銀五両を出して族人の「寄附の」先陣を切った。東軒公の曾孫陽迪らは、「祠堂の」前座を建てるのに十分な灰埴地を寄附した。これ以後、みなが争うように三両・二両・一両・五錢という額を出し、ともに祠堂を完成させた。(中略) 後堂の磚は文嶠公の孫維彬が負担した。⁽²¹⁾

丁氏一族は正徳七年(一五二二)に、彼らが居住していた文峰畝中に祠堂を建てようとした。冒頭部分では、この事業が丁氏にとっては儒教的儀礼に則った「正当な」祠堂の建設であったことが述べられている。

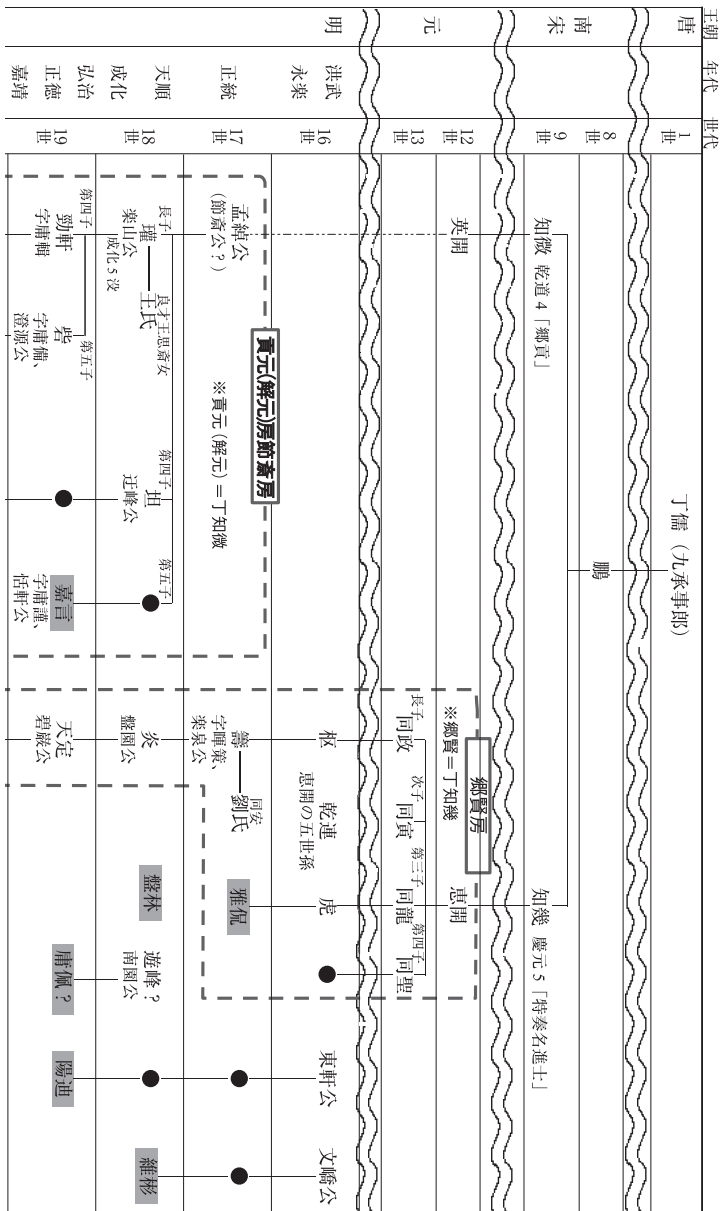
次に、丁氏と「家廟」の歴史について記されている。「家廟」の由来は三世祖の時まで遡るが、「兵火」で失われて以降、この時まで長らく再建されなかったという。唐末〜宋初の人である三世祖十七郎(丁遷)が初めて「家廟」を建て、それは「象山大宗祠」といった。しかしながら、淳熙十五年〜十六年(一一八八〜一一八九)の山寇の襲撃によって焼け落ち、子孫は数カ所に分居して、それぞれ「小宗」を立てたという。すなわち『古譜』は、丁氏は唐末〜宋初にはすでに祠堂を有しており、文峰畝中祠堂の建設とは本来存在した「家廟」の再建であったことを主張する。祠堂を再建する以前の祭祖活動は、おそらくは祖先祭祀が房派(分支)内や家族のみで行われ、次第に共通祖先を祀る気運が高まっていたとはいえ、「宗族」としての結合状態にはなかったと『古譜』は述べたいのである。⁽²²⁾ 丁氏にとって、祠堂の再建は「敬宗収族」の觀念を具体化し、直系血族の範囲を超えて結合するきっかけとなった特記すべき出来事として位置づけられていたのである。

続いて、祠堂再建に関わった族人について述べられ、丁氏の蓄財および土地所有が示唆されている(登場する人物の系譜関係は「図1-2」を参照)。祠堂再建を首唱したのは一九世の丁砦(澄源公)であった。南宋の「郷賢丁知幾」

の兄「貢元（解元）丁知微」の子孫を標榜する「貢元（解元）房」に属する人物である（「図―2」の図注③参照。以下、「貢元房」と称す）。族人たちがこれに応え、一八世の盤林、一族の長老で一七世の雅侃、一九世の庸佩らも銀両を出資した。東軒公の曾孫陽迪や文嶠公の孫維彬は祠堂の建築費用あるいは資材を負担した。雅侃は一三世丁同聖の玄孫に当たり、九世の「郷賢丁知幾」の子孫を標榜する「郷賢房」に属した。盤林・庸佩・陽迪・維彬がどの房派に属するのか未詳ではあるが、陽迪・維彬は過去の族譜編纂者の子孫にあたる。すなわち、「文峰丁氏祠堂記」の記述に従えば、文峰畝中祠堂の建設は、貢元房の丁砦の発案のもと、丁氏が房派を超えて協力し合った事業であったことが窺える。

この祠堂ではどの範囲の祖先を祀ろうとしたのであろうか。明朝の規定では、品官は住居の東側に「家廟」を築くことができたが、それでも四世代前までの直系の祖先すなわち高・曾・祖・禰（考）⁽²³⁾までしか祀ることはできなかった。庶民に至っては祖父母・父母を各々の家で祀ることしか許されていなかった。しかし、文峰畝中祠堂は、五世代以上前の祖先まで祀っていたと思われる。なぜならば、郷賢房と貢元房が祖先を同じくする同族として統合されるためには、丁知幾と知微の父親の代まで遡らなければならなかったからである。明清時代に宗族組織が発展する必要不可欠な前提条件として、直系の四代前までの祖先を祀るという公的規範を超えて、始遷祖や先祖までもが祀られるようになったことが挙げられる。⁽²⁴⁾すなわち丁氏は、文峰畝中祠堂について、丁知幾・知微兄弟とともに祀り、それ以上の世代、ひいては始遷祖をも祀る祠堂として、一族全体の凝集力を強化する意味できわめて重要な装置であると認識していたのである。

【図—2】 丁氏系図 (概略)



	20世	興龍 英乾公	品 履素翁	■	嗣 雲岡公	少子 瑞峰	
隆慶 22世	21世	●	慎齋—— 赤嶺御後女 鄭氏 柳己母	晚香 仰雲公	[大馨]	系譜関係の明確なもの ——系譜関係未詳 ——婚姻関係	正徳7年(1512)の祠堂建設関係者
		長春 寄凡	柳己 玉明公 隆慶17~崇禎9				

注：本系図は『白石丁氏古譜』（嘉慶2年（1797）編纂）より作成。

- ① 盤林・維彬・庸佩・陽迪の所風房派は不詳。
- ② 丁皆は、『鑑蹟紀』によると、各地で生業を営んだ後、弘治5年（1492）に白石に戻った。従って成化年間の出生であると比定できる。丁嘉言「文峰丁氏族譜叙」嘉靖10年（1531）で、当時生存していたことが確認できる。
- ③ 丁知微について、「解元」「貢元」との記述が混在する。丁世勲「文峰丁氏宗史叙」順治13年（1656）には「解元房」とあり、丁克賢（27世）「重興文峰賢臣大宗祠記」乾隆59年（1794）に「貢元房」とある。
- ④ 「迪功郎之元孫雅侃」について。「迪功郎」であった者は、8世丁鵬、9世丁知幾、10世丁思誠、11世丁日起、13世丁同聖が見られるが、祠堂建設は18世・19世頃の世代が中心となっており、「迪功郎之元孫雅侃等、爲族之誓」と述べられていることから、13世丁同聖の玄孫だと考えられる。
- ⑤ 「南園公遊峰之予庸佩」について。丁嘉言「文峰丁氏族譜叙」によると、南園公遊峰は18世丁坦（迂峰）とともに明代になって「再集」の譜を編纂した人物である。南園公と庸佩の世代は未詳であるが、南園公とともに族譜を編纂した丁坦が18世であること、「鑑蹟紀」には19世の人物として丁勁軒（字庸輔）、丁皆（字庸輔、澄源公）、丁嘉言（字庸謹）が記載されており、輩行字として「庸」がつくことから南園公は18世、庸佩は19世であると判断した。
- ⑥ 東軒公は、明代に文嶋公とともに「一集」の譜を編纂した人物である。丁嘉言「文峰丁氏族譜叙」。黄文史「江東丁氏族譜序」に「今年春其家方脩古譜、十六世孫伯御遣其子固即從學于余、以其譜求言」とあり、ここに登場する「十六世伯御」は、東軒公か文嶋公を指すと考えられる。従って、東軒公・文嶋公は16世の人物である可能性が高い。
- ⑦ 崇禎『閩書』巻130、英田志所収の丁讐の伝には、丁坦が丁讐の「弟」であるとの記述がある。
- ⑧ 縦軸の年代はおおよそその目安である。

それでは、房派を超えて協力しあったという文峰畝中祠堂建設の記録は何を意味しているのか。次章では、祠堂建設前後の時代を生きた族人の伝の分析を通じて、この点について検討することにした。

第二章 白石丁氏と宋代の丁知幾

(一) 祠堂建設前後の丁氏の社会的状況

「懿蹟紀」には、洪武く永楽を生きた一六世の丁虎・丁乾連・丁枢の伝が収められている。これによると、丁虎は朱子学を地域一帯に広め、郷人から敬重されていた。丁乾連は永楽年間に「明経俊秀」すなわち貢生となった。

丁枢は古典籍に通曉し、龍溪県出身で都察院左都御史にまでなった鄭駟と交友関係にあった。彼は永楽初に「薦辟」されたが応じなかったという。⁽²⁵⁾ 丁枢の息子籌（樂泉公）もまた在野で活動し、同安県の母の実家（劉氏）から援助を受け、多くの弟子をとることで家産を積んだ。宗族と郷人から重んじられ、遠近の学者が彼の著作を抄写しに訪れたという。丁籌の孫の天定は、挙業は断念したが諸子を熱心に教育した。天定の末子の端峰は丁樛己の幼少時の業師であったが、府県学への入学は果たせなかったという。彼らは、丁太瑩（郷賢房）や丁樛己（貢元房）から、丁氏の学問の礎を築いたと称えられている。⁽²⁶⁾ 以上は郷賢房に属する人々である（「図一2」）。

同じく「懿蹟紀」所載の伝によると、貢元房に属する一八世の丁坦（迂峰公）は一五世紀中頃の人である。天順年間には社学教育が振興され、朝廷の推進の下、福建でも多くの地方で社学が設立された。このとき、丁坦は、生員身分を獲得した後に、漳州府の「社学長」に任命された。彼はまた漳州府鎮海衛出身の在野の知識人陳真晟と交

友関係にあった。⁽²⁷⁾前掲の「文峰畝中祠堂記」の執筆者である丁嘉言は丁坦の甥に当たり、彼もまた「社学教授」となっていた。⁽²⁸⁾

祠堂建設の後、貢元房では挙業への志向がより高まったことが窺われる。祠堂建設を提唱した丁砦の息子丁器（履素翁）は、科挙の受験を目指す童生であり、郷里で郷飲酒礼を行う立場にあったが、生員にはなれず、子弟の教育に努めた。彼は、龍溪県赤嶺の人で正徳十一年（一五一六）の挙人である鄭復と交流し、丁器の息子慎斎は生員であり、鄭復の娘を妻とした。⁽²⁹⁾慎斎の息子である丁楹己は幼少時、教師を招いて文峰畝中祠堂で学んだという。丁楹己と同一世代の者たちは生員となったり、漳州府芝山書院で講学したり、地域の郷紳と交流している。⁽³⁰⁾丁坦の曾孫の丁晩香（仰雲公）もまた儒学的教養を身につけ、祠堂での祭祀や地域での郷約を執り行う立場にあり、宗族や郷里に「公事（諱い・もめ事）」があれば、人々は必ず彼に意見を求めたという。丁楹己は、「迂峰公は道学」の教養「によつてわが一族の儒祖となり、「その子孫が」代々これを継承し、現在は唯一虫食いのある「古い」書物を所蔵する家柄である」と述べている。⁽³¹⁾貢元房の人々は、明代中葉における「社学教授」の地位を経て、明末には祖先祭祀や郷約を主催し、同族内や地域社会において、儒教的教養を持つ者として指導的立場となるに至っていたのである。

ただ、丁氏は明初から明代中期までごく僅かな貢生・生員を出したのみであり、それは丁楹己と丁世勲も認めている。⁽³²⁾貢元房の上昇は郷賢房より遅く、明代中期（二五世紀半ば）以降、とりわけ祠堂建設に関わった世代の前後のことであったと推定される。祠堂建設はその後の上昇傾向の加速を促し、明末から清初の丁楹己や丁世勲の代に

なつて一族の中心的房派となつた。丁楸己は崇禎五年（一六三二）の族譜編纂に関わり、泉州府の何喬遠をはじめとする多くの閩南の郷紳や地方官と交遊を持ち、丁世勲は南明の隆武政權に仕え、順治十三年（一六五六）の族譜編纂および清初の他姓との訴訟を主導したのである⁽³³⁾。

両房が共通祖先のもとに統合していることを象徴する文峰畝中祠堂は、特に貢元房にとつて、一族内部ひいては地域社会における地位をより高める機能を果たしていたといえよう。従つて、その建設が克明に記録されているのである。

（二）丁知幾と「漳州太守王公諱仲謙重脩官港記」

丁知幾は慶元五年（一一九九）の「特奏名進士」、知微は乾道四年（一一六八）の「郷貢」として地方志に見出される⁽³⁴⁾。一方で「懿蹟紀」丁器伝には、鄭復の執筆した丁砦の伝を引用され、「家柄は宋代の進士丁知微・知幾府君の子孫にあたる。府君は大いに農田を育て、用水路を開鑿し、民は今に至るまでこれの恵みを受けている。一族の名望と徳行、郷里の「一族への」慈しみと親しみを表している」とある⁽³⁵⁾。「懿蹟紀」によると、丁知幾は広東の潮陽県主簿となつて、職を辞した後で郷里の龍溪県に戻り、兄知微と共に土地を寄附して「港（灌漑用水）」を開き、柳営江の水を引いたという⁽³⁶⁾。この事蹟は、洪武二十年（一三八七）頃に漳州府知府として在任していた王仲謙によつて称えられ、碑文に記された⁽³⁷⁾。この碑文は嘉靖『龍溪県志』卷一、地理、川、官港に見出されるが、「懿蹟紀」丁知幾伝にも「漳州太守王公諱仲謙重脩官港記」と題して収録されており、以下のように記されている。

私は洪武二十七年に国子監から出て漳州の知府となった。当時、生員の陳子確は府曹の吏役であつた。ある日、郷人の楊敬和等を率いて衙門に来て言上するには、「漳州の龍溪県二十九三十都は、海がその東南をめぐり、多くの山が西北をとり囲んでいます。地形は瘠せており、山や窪地があつて、「海拔が」高く平らで広い土地がありません。近ごろ、高地で乾燥しているところは、いつも日照りに苦しみ、低湿地は常に塩害を恐れています。豊作の年であつても、得失は常に相半ばしています。昔、宋代の淳熙二年に、里人の進士丁知幾という者がおり、「潮州」潮陽県主簿でありました。本郷において、水利を興してこの地域に利益をもたらそうとしました。そこで郷人の陳太柔らを率いて、上申状を持って福建提挙司に赴き、水利を興すことを述べました。

「福建提挙司は」これに同意し、そのことを下達して、州県において民を募らせました。上は二十八都文甲から、下は二十九「三十」都石尾に至るまで、土地を開拓して港一道を築きました。幅は十八尺、深さは十六尺であり、そうして柳「営」江の淡水を通じさせること、およそ若干里、内側に石で堰堤を築き、閘門を二つ設け、旱魃と水害を防いだのです。また石橋十数箇所を港上に架け、「兩岸の」往來を通じさせました。農閑期のたびに、官が「人民を」監督して修築させたので、「官港」と称され、石に刻んで碑文を建てて記しました。二都の田地は、高地や低地、「柳営江から」遠いところも近いところもみな、その灌漑を頼りにしました。今は「それから」二百三十九年になります。長い年月を経て、ほとんど半分が塞がつてしまい、耕す者はこれを憂えております。きつと官司に頼れば、修築の成果は集まりやすいでしょう」と。私は感じ入つて言った。

「農事のために水利を興すことは、私の第一の務めである。どうして負担が大きいと言つて断るだろうか」と。

そこで民に告示して、修理の事業を行つた。よつて「陳」子確に命じてその労役を監督させ、民は喜んで奉仕した。精を出すこと一か月、「丁」知幾の旧跡はまるで新しく完成したかのようになった。橋は倍の広さになり、耕す者も通行人も利とした。すでに事業は終わったが、「彼らが」また来て記を執筆するよう頼んだ。（中略）「丁」知幾は民に功労があつたではないか。よつて「陳」子確に命じて郷人を率いて祠を建ててこれを祀らせ、³⁸⁾そうして郷人に示して、毎年修繕を加えさせる。その後の恵みを受けた者は、その功労の由来があることを知るであらう。

この史料によると、丁知幾は淳熙二年（一一七五）に郷民の陳太柔らと共に水利を興し、二十八都文甲社から二十九三十都石尾社まで灌漑用水路を開鑿した。これは人々から「官港」と呼ばれていたが、王仲謙が赴任した洪武二十年（一三八七）代にはその大半が塞がつており、生員の陳子確と郷民の楊敬和等が王仲謙に修築を求めた。丁知幾の開鑿した官港は地域の人々にとって不可欠の社会基盤となっていたのであり、彼の功績は碑文によつて郷里に周知されていたという。王仲謙は陳子確に命じて工事を行わせ、完成後は丁知幾の功績を記した碑文を執筆した。この碑文が「漳州太守王公諱仲謙重脩官港記」として族譜に収録されたのである。すなわち、白石丁氏は、この碑文の存在を前提として丁知幾を自らの祖先として設定した上で、地域社会における地位の正当化に利用したことが窺える。

王仲謙は祠廟を建てて丁知幾を祀り、水利の功績を称えた。当該史料では丁知幾だけを祀ったように書かれているが、実際には陳太柔も共に祀られていた。祠廟の名称は「興利祠」といい、白石社の慈濟宮の跡地に建てられた

ものであった。⁽³⁹⁾「懿蹟紀」によると、慈濟宮は端平二年（一二三五）に丁知幾の孫に当たる丁自得（一二世）が土地を寄附して官港の辺に建てたものである。後には、丁自得の孫の丁同寅が父丁惠開（自得の息子）の祠堂の烝嘗田を丁自得の建てた慈濟宮の祭田として寄附したという。⁽⁴⁰⁾従って、丁氏の認識では、興利祠は丁氏の祖先の土地に立つ、専ら丁知幾のために建てられたものであった。

しかし、丁知幾専用の祠廟ならば、丁知幾の直系子孫ではない貢元房は祭祀に参加する族人の範囲には入らないであろう。官港の開鑿は『古譜』では丁知幾・丁知微共同の功績とされているが、当該碑文では丁知微への言及がない。丁知微の地方志における初出は嘉靖十四年（一五三五）刊の嘉靖『龍溪県志』である。これは丁氏が族譜を編纂した嘉靖十年（一五三二）の直後に当たる。明代中期（一五世紀半ば）頃から上昇し、社会的地位の象徴として正徳七年（一五二二）に郷賢房とともに文峰畝中祠堂を建設した貢元房は、嘉靖十年（一五三二）の族譜編纂を通じて祖先の丁知微が地域社会に知られるようになったのではない。⁽⁴¹⁾丁知微が丁知幾の兄として地域社会から認められるためには、郷賢房と貢元房が祖先を同じくするものとして統合していなければならない。文峰畝中祠堂の建設と嘉靖年間以降の族譜編纂事業は、郷賢房と貢元房が丁知幾・丁知微兄弟を祖先とする同族であることを確認すると同時に、明代以前に「官」の身分を獲得しており、正当に「家廟」を建設できるといふ根拠を示すために行われたとも解釈できよう。⁽⁴²⁾貢元房に属する丁楸己は、丁知幾と知微を「兄弟が合わさって一つとなり君・親に仕えた。前後房の祖とされているのも当然である」と称えている。⁽⁴³⁾

以上のように、郷賢房には丁知幾の事蹟を記した碑文および興利祠が存在していた。上昇の遅れた貢元房にとつ

て、一族内部や地域社会においてさらなる地位の向上を図るには、まず丁知微の名望を高める必要があった。そこで貢元房は郷賢房との間に一族同士の統合を推進し、丁知微が丁知幾の兄であると設定してその事蹟にあやからうとした。そうして初めてこの兄弟を一族全体の威信の源泉として再設定することができたのであった。その過程で、丁知微が弟の事業を支えたという言説や、丁知微も「宋代の進士」であったという言説が生まれたと考えられよう。官港は王仲謙以来数回にわたって浚渫が行われ、嘉靖年間には二〇里の長さ、崇禎年間以降は三〇里の長さになり、「陡門」も三つに増え、拡張され続けたという。⁽⁴⁾官港は、明末清初に至っても当該地域に不可欠の水利施設であり、それを築いたのは丁氏の祖先である丁知幾と丁知微でなければならなかったのである。

第三章 白石丁氏の経済的基盤

前章では、明代中期（一五世紀半ば）以降に貢元房の上昇が見られたことを明らかにした。宗族の発展には、何らかの経済的基盤が不可欠である。それでは、貢元房の上昇の背景には如何なる経済的基盤があったのか。本章では、祠堂建設を首唱した丁砦とその家族の記録を分析し、丁氏の経済的基盤について検討する。

「懿蹟紀」所収の丁瓘・丁砦・丁器・丁楨己四代の伝には、商業活動による家産の拡大があったことを示唆する記述が存在する。一八世の丁瓘は、龍溪県二十九三十都の良才村に居住し、数箇所の房屋を所有していたとされる。丁瓘は近隣の読書人であった王家と婚姻関係を結ぶことによって、一族の経済基盤を強固なものにしていった。白石の「故居」には多数の家人と奴僕を抱え、「出納帳簿を出して家中の者に与え、家の切り盛りは弟や息子たちに

割り当て」るなど、大家族の長として家政を取り仕切っていたとい⁽⁴⁵⁾う。

丁瓘の息子の丁砦の伝には、白石における土地の開拓と所有の規模について記されている。彼は良才村に居住していたが、「西溪」で田土を増やし、「北溪の砦」を経営した後、弘治五年（一四九二）には白石に戻り、一帯の土地を開拓した。その結果、家五〇間余り、田産八〇余畝、池塘八・九カ所、肥料小屋一五棟を所有するに至⁽⁴⁶⁾った。

「北溪の砦」とは、九龍江北溪上流の山間部に位置する龍溪県二十五都に二四カ所存在していた鉄砦に関連するものと思われる。当時の漳州府には、龍溪・龍巖・長泰・漳平四県の山間部に鉄砦・鉄場が存在したが、龍溪県は最も数が多かったようである。鉄砦には他県出身の砦夫が集まって盗賊の巢窟となり、「豪民」によって占拠・支配されていたとい⁽⁴⁷⁾う。二十九三十都の所在する柳営江の東岸一帯は、貨物を上流地域へと運搬する商船の往来が盛んな土地であり、丁砦伝の記述はこの社会背景に関連するものであると思われ⁽⁴⁸⁾る。丁砦伝にはまた「計量を慎重に行つて物を公正に取引し、利益を減じて人を裕かにした」という記述があり、主に商業活動によつて地域の人々に便宜を与えていたことが窺⁽⁴⁹⁾える。丁器についても、白石文峰の地主として、養蚕小屋や養殖池および菜園・果樹園を所有し、そこでは荔枝・龍眼・棕櫚・筍などの商品作物の栽培につとめたとい⁽⁵⁰⁾う。

ここからは、閩南に特徴的な宗族発展の事情が窺われる。閩南は人口稠密で耕地が少ないこともあり、宋代以降商業が発展し、商品作物栽培や手工業が発達した。このような背景のもとで、宋元時代以降、海上交易に従事する者が多くいた⁽⁵¹⁾。明清時代になると族的結合を媒介にした海商経営も行われており、それが当該地域の宗族の維持運営の重要な資金源となつていた⁽⁵²⁾。

丁璫・丁砦の二代は、その経済的活動によってかなりの財を蓄積したこと、丁氏の発展に寄与した。丁璫は高・曾・祖・考の四代の祭田を置くことで祭祀を途絶えさせず、分家を経ても一族が統合してゆけるように謀った。さらに灌漑事業を通じて富を地域社会に分配し、丁氏の当地における社会的地位を確固たるものにしていった。⁽⁵³⁾ 丁砦は多方面の経済活動を行う以外に、同族の運営にも熱心に取り組んだ。丁砦は小作料の積み立てにより祭田を増拡し、彼自身の家の「宗廟」を建て、嘉靖三年（一五二四）には始祖承事郎の墳墓を築いたという。⁽⁵⁴⁾ 彼は、第一章で論じたように祠堂再建を主導し、また烝嘗田を置いて文峰畝中祠堂での祭祀の費用に供したほか、族内での救恤や挙業への投資などに尽力した。そして嘉靖十年（一五三一）には族譜の編纂に参加したのであった。⁽⁵⁵⁾ これは閩南宗族の形成と発展の典型的一例といえよう。

一方で、『古譜』によれば、丁氏一族の発展の基礎となったのは、唐宋以来の「公貯」であるという。丁氏は唐代の九承事郎以来、代々白石一帯の耕地の開墾や灌漑を行うと共に、貧者への賑濟や就役する者への援助等によって族人に恩恵を施してきた。⁽⁵⁶⁾ 南宋末の丁英開（一二世）は千畝余りの「洋田」の灌漑を行った。⁽⁵⁷⁾ 丁同寅（二三世）は橋梁や井戸を築き、白石社から「官道」に至るまでの道を舗装するなど、社会基盤の整備を図ったという。⁽⁵⁸⁾ 「懿蹟紀」に記されたこれらの事績の意味するところは、丁氏が所有するに至った白石一帯の族産は、明代中期以降の公正な経済活動の努力によって得たものであり、そもそも唐宋時代から開墾に励んでいたということである。これは、数少ない貴重な耕地に対する丁氏の優先権を主張するものではないだろうか。ただし、右の諸祖先のうち、丁同寅だけは郷賢房の祖先である。第二章で述べたように、一族の権威を表す興利祠も郷賢房の所有地の上に立っていた

ものである。これらがすべて貢元房をも含んだ丁氏全体の影響力の下にあると認められるためには、郷賢房と統合していることが必要だったのである。

明清交替とりわけ清初の遷界令発布は当該地域社会に多大な混乱をもたらした。その中で丁氏は他宗族と土地所有を争った。丁瓘・丁砦らの事蹟と始祖承事郎ら唐宋時代の祖先の存在は、当該地域における、丁氏一族の各種経済活動を基盤とした発展そして土地所有に対して歴史的な正当性を附与するために重要であるといえよう。

おわりに

以上、本稿で論じたことは、以下のように整理できよう。

丁氏一族にとって、正徳七年（一五一二）の文峰畝中祠堂の建設は郷賢房と貢元房の統合を表す特記すべき出来事として位置づけられ、族譜に記録されていた。彼らの威信を示すものとしては、郷賢房の祖先である丁知幾の功績を記した洪武年間の漳州府知府王仲謙による碑文と興利祠が存在していた。

貢元房は、明代中期から上昇が見られ、その各種経済活動による蓄財で、祠堂建設や族譜編纂、始祖の墳墓の修築を主導し、その後明末清初にかけては儒教的教養を持った知識人層として一族を指導する中心的房派となるに至った。しかしながら、後発の貢元房には、社会的地位を保証する歴史的背景が欠けていたため、郷賢房と統合することで郷賢房の祖先丁知幾の兄丁知微の子孫であると再設定し、郷賢房および丁知幾の名声にあやかろうとした。文峰畝中祠堂の建設は、両派の統合を象徴するものとして重要であり、記録して残されたのである。両派の統合後、

明末（一七世紀頃）までに丁知微・知幾がともに協力して官港開鑿に貢献したという言説が形成されたのではない。丁氏が商業活動等を通じて蓄積した富を同族内および地域社会に還元したことで発展したという記録は、彼らの地域社会における指導力を経済面からも正当化し、始祖承事郎をはじめとする唐宋時代の祖先の事績はそれを補強する役割を果たした。

従って、冒頭で述べたように、始祖承事郎の来歴を〈陳元光遠征随伴伝承〉に附会しつつも入閩時期を陳元光らよりもより早く設定しているのは、漳州府内における陳元光の權威に便乗する一方で、他姓宗族に対する優位性を主張しようとした結果ではないだろうか。始祖承事郎と郷賢丁知幾という二人の祖先は、明末清初の混乱期に一族の中心であった貢元房にとつて、一族の団結と復興のイニシアティブを取り、その威信を地域社会に示す上できわめて重要な存在であったために、族譜に詳細に記録されていたといえよう。併せて『古譜』が地方志に採録されたことや、丁知幾や丁儒が郷賢祠・名宦祠に配祀されたことが族譜に明確に示されているのは、丁氏の歴史が地方衙門の「お墨付き」を得た「信史」だと証明するものであったからである。

『古譜』では、丁氏の同族統合が明代中期に始まったことが示唆されている。祠堂の建設と族譜の編纂を通して宗族を形成する動きは、宋代以降、福建の各地域で共通して見られるが、広範囲に普及し始めたのは明代中葉のことである。⁽⁵⁹⁾嘉靖年間後半になると、漳州府では密貿易・海寇の盛行を背景とした〈嘉靖大倭寇〉の襲来があり、社会と経済は大きな打撃を受けた。宗族にとつても危機的状況となり、その結果宗族は土堡を築くなどして集住し、自己防衛機能と武装の強化を図った。これが収束すると、各地で宗族の再建が見られるようになった。⁽⁶⁰⁾丁氏もまた

この頃、祠堂修築や族譜編纂を通じて宗族を復活させようとした。

また、『古譜』からは、珠江デルタの宗族に見られるような大規模な族産（土地）所有を見出すことができず、一族の経済的基盤となったのは主に商業活動であったことが窺える。閩南は、特に明代後期以降多くの海外移民を生み出した点で特徴的な地域である。『古譜』にも、明代後期以降、当地の人々が海外貿易によって利益を上げていることが記述されており、丁氏の族人もまた客商として他省や南洋および台湾に渡っている。明末以降になると、海外送金を祠堂の修築や他宗族との械闘等の費用に充てていた。⁽⁶¹⁾丁氏の宗族形成の言説には、明代の福建特有の宗族の発展状況が反映されているといえよう。

註

(1) 嘉靖『龍溪県志』卷一、地理、廂里および甲社。

(2) 丁仰高等編、漳州市地方志辦公室一九八六年整理・翻印、抄本。原本は龍海市地方志辦公室所蔵。これの影印が陳支平編『閩台族譜彙刊』桂林・広西師範大学出版社、二〇〇九年に収録されている。また、漳州市海峡文史資料館の運営するウェブサイト「漳州族譜对接網」(<http://www.zczp.cn>)で公開されており、オンラインで閲覧することができる。本稿では基本的に『閩台族譜彙刊』所収のものを参照した。

(3) 「九承事郎」は一見すると官名のようにあるが、康熙『漳州府志』卷一九、宦蹟上、唐宦蹟、懷恩県尉、鍾紹京および康熙『漳浦県志』卷六、職官志、唐漳浦郡、録事、丁儒では、漳州府の庶民が丁儒を「丁承事」と呼んでいることについて、承事という官位は唐代には存在せず、実際の官名を表したのではないとしている。「〇〇郎」という官名に見える語は華南の族譜に多く見出されるが、劉志偉によると、これは華南の畬や瑤の男子が成人する際に行う道教の過渡（出家）の儀式で道士や師巫から伝授される名号である「郎名」の名残であり、明代以降に儒教的理念

に則って官名として解釈しようとしたものであるという。

劉志偉「族譜与文化認同——広東族譜中の口述伝説」王鶴鳴等主編『中華譜牒研究——邁入新世紀中國族譜國際學術研討會論文集』上海：上海科學技術文獻出版社、二〇〇〇年所収、三六頁～三九頁。「郎名」については Wing-hoi Chan, "Ordination Names in Hakka Genealogies: A Religious Practice and its Decline," in David Faure & Helen F. Siu (eds.), *Down to Earth: The Territorial Bond in South China*, Stanford: Stanford University Press, 1995, pp. 65-82.

(4) 各「序」によって、丁儒や定住の経緯に関する言説には若干の異同があるが、概ね始祖が象山に居住し、子孫が後に文峰畝中に移居した、という点では一致している。象山は白石社内に存在する墳山であると考えられる。『古譜』「漳白石丁氏宗譜鄉賢房年月紀卷」には、一二世丁惠開が「象山」に埋葬され、一三世丁同寅は「象山祖園下」に埋葬されたとある。また、白石社に居住する楊氏の族譜「白石楊氏家譜」『行実志』には、族人の墳墓の所在地として「丁象山」が見える。文峰畝中は『龍溪県志』や『漳州府志』に見出すことができないため何処を指すのか未詳であるが、白石社内に存在する自然村の名称か。九承事郎の諱が儒、字が学道であることは、元代の釈褐状元で二十八都

文甲社人の黄思永による「江東丁氏世譜序」のほかは、二一世丁太瑩「姓氏源流序」崇禎五年（一六三二）および丁太瑩が執筆し後に二四世丁世勲が整理した「白石丁氏懿蹟紀」丁儒伝に見える。

(5) 〈陳元光遠征随伴伝承〉とは、福建漳州・広東潮州沿海部一帯の人々の間に広く流布した〈祖先移住伝承〉・〈祖先同郷伝説〉であり、祖先が唐代に嶺南行軍総管陳元光の南征に随伴して河南から移住してきた、というものである。拙稿「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」『史朋』四七、二〇一四年。なお〈陳元光遠征随伴伝承〉とは瀬川昌久による呼称である。瀬川昌久『族譜——華南漢族の宗族・風水・移住』風響社、一九九六年、二〇三頁。

(6) 黄向春「『蛮／漢』“辺界的流動与歴史記憶的重構——以東南地方文献中的“蛮獠／畬”叙事为例」『學術月刊』第四一巻六月号、二〇〇九年および前掲拙稿。

(7) 前掲拙稿。

(8) 崇禎「漳州府志」巻六、祀典志上、郷賢祠、同書、巻二八、坊里志、水利、官港および康熙「漳州府志」巻八、祀典、名宦祠。丁儒の配祀された時期は不詳であるが、崇禎元年（一六二八）刊の崇禎「漳州府志」には見出されないため、崇禎／康熙頃と思われる。

(9) 「懿蹟紀」丁儒伝に附された丁世勲「奸商徐躍佔葬賢宦祠地冤掲」(康熙十年(一六七二)など。当該訴訟や明清初の丁氏の動向については別稿にて論じる予定である。
(10) 『古譜』丁克賢(二七世)「重興文峰賢宦大宗祠記」乾隆五十九年(一七九四)。

(11) 多賀秋五郎『宗譜の研究——資料編』東洋文庫、一九六〇年、五七頁、片山剛「明代珠江デルタの宗族・族譜・戸籍——一宗族をめぐる言説と史実」井上徹・遠藤隆俊編『宋・明宗族の研究』汲古書院、二〇〇五年所収、四八二頁註(一)。

(12) 『古譜』丁太瑩「宗史伝記序」崇禎五年(一六三二)および丁世勲「宗史懿蹟紀引」順治十三年(一六五六)。

(13) 傅衣凌の〈郷族〉に関する研究の代表的なものとして「論郷族勢力對於中国封建経済的干渉——中国封建社会長期遲滞的一个探索」同『明清社会経済史論文集』(傅衣凌著作集)、北京・中華書局、二〇〇八年所収(初出は一九六一年)がある。

(14) 陳支平『近五百年來福建的家族社会与文化』北京・中国人民大学出版社、二〇一一年(初版は一九九一年)、鄭振滿『明清福建家族組織与社会変遷』北京・中国人民大学出版社、二〇〇九年(初版は一九九二年)。

明代の福建漳州府における宗族の形成

亀岡

(15) 鄭振滿「明清福建的里甲戸籍与家族組織」同『郷族与国家——多元視野中的閩台伝統社会』北京・生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇九年所収(初出は一九八九年)および同前掲『明清福建家族組織与社会変遷』。

(16) 宋代以降の宗族組織の発展にとつて、族譜・祠堂・族産の三つは不可欠の要素として挙げられる。こうした学説整理については、遠藤隆俊「総論——宋元の部」および井上徹「総論——元明の部」、ともに井上徹・遠藤隆俊編前掲書所収。

(17) Michael Szonyi, *Practicing Kinship: Lineage and Descent in Late Imperial China*, Stanford: Stanford University Press, 2002. Yonghua Liu (劉永華), *Confucian Rituals and Chinese Villagers: Ritual Change and Social Transformation in a Southeastern Chinese Community, 1368-1949*, Leiden: Brill, 2013. M・スズーニや劉の研究視点は、前掲の鄭振滿の研究のほか、D・フォールや劉志偉らによる珠江デルタ研究に見出され、代表的なものとして David Faure, *Emperor and Ancestor: State and Lineage in South China*, Stanford: Stanford University Press, 2007. が挙げられる。華南研究史の整理については、科大衛(D. Faure)「告別華南研究」華南研究会編『学歩与超越：華南研究会論文集』香港：文化創造出

版社、二〇〇四年所収。

(18) 瀬川昌久前掲書および片山剛前掲論文。

(19) 甘利弘樹「華南山間地研究へのアプローチ——広東・福建・江西交界地域を中心として」『歴史評論』六六三、二〇〇五年および黄向春前掲論文。

(20) 陳元光に関する研究史については前掲拙稿参照。また、謝重光「陳元光文献資料輯校与疏証」同「陳元光与漳州早期開発史研究」台北・文史哲出版社、一九九四年所収および陳進国「福建譜牒風水訴訟案例資料摘抄」同「信仰、儀式与郷土社会——風水的歴史人類学探索（下）」北京・中国社会科学出版社、二〇〇五年所収で『古譜』が紹介されている。移住伝承に関する研究としては牧野巽「中国の移住伝説・広東原住民族考」（牧野巽著作集第五巻）、御茶の水書房、一九八五年。珠江デルタの〈南雄珠璣巷伝説〉と当該地域の社会と文化との関連については、David Faure, "The Lineage as a Cultural Invention: The Case of the Pearl River Delta," *Modern China*, 15(1), 1989, pp.4-36. 劉志偉「附会、伝説与歴史真実——珠江三角洲族譜中宗族歴史的叙事結構及其意義」王鶴鳴等主編『中国譜牒研究——全国譜牒開發与利用學術研討會論文集』上海・上海古籍出版社、一九九九年、片山剛「広東人、誕生・成立史の謎をめぐって——言説と史実のはざまから」『大阪大学大学院文学研究科紀要』四四、二〇〇四年。

(21) 「古譜」丁嘉言「文峰丁氏祠堂記」嘉靖十年（一五三

一）「古者作室、必先立祠宇、以安先靈。高・曾・祖・考以其位、禴祠・烝嘗以其時、昭穆之所以序、勸懲之所以明也。我始祖家於象山、爰始爰謀、百事草創。三世祖十七郎始營家廟、石其柱二十有四、磚地墜垣、自寢而庭、規制井然。自兵焚之後、越數世、欲重建於畝中而難。（中略）正德壬申冬至之會、十九世孫澄源倡而言曰、有能興祠堂、綱紀其事者、余先之銀二十兩。十八世孫盤林、每一言足係輕重、繼而曰、爲承事之後者、暨能如是。凡百之費吾其任之。迪功郎之元孫雅侃等、爲族之耆、遂以三使公祭業餘貲銀二十兩副之。南園公遊峰之子庸佩等、各以銀五兩爲宗人倡。東軒公之曾孫陽迪等、又將灰埕地捨入、以足前座。由是三兩二兩一兩五錢者、皆爭出、共爲其事（中略）若後堂之磚、又出文嶠之孫維彬焉」。当該史料中の「灰埕地」とは、特に、福建において海辺で牡蠣を養殖するための土地を指すと考えられる。

(22) 「懿蹟紀」丁孝先（九世）伝および丁炎（一八世）伝
(23) 正徳『大明会典』巻八八、品官家廟。牧野巽「中国国家研究（下）」（牧野巽著作集第二巻）、御茶の水書房、一

九八〇年、二五三頁。

(24) 鄭振滿前掲『明清福建家族組織与社会変遷』一七四頁
～一七五頁。

(25) 「懿蹟紀」丁虎伝および丁枢伝。劉駟については、正徳『大明漳州府志』卷二六、礼紀、人物伝、国朝人物。

(26) 「懿蹟紀」丁籌伝および丁炎伝。

(27) 「懿蹟紀」丁坦伝。陳真晟については正徳『大明漳州府志』卷二六、礼紀、人物伝、国朝人物。天順年間の社学振興政策については、五十嵐正一「明代社学教育の推移」同『中国近世教育史の研究』国書刊行会、一九七九年所収。明代福建の社学については、劉海峰・莊明水『福建教育史』福州・福建教育出版社、一九九六年、一三五頁～一三九頁。

(28) 「懿蹟紀」丁嘉言伝。

(29) 「懿蹟紀」丁器（二〇世）伝および丁一楠（二二世）伝。鄭復については、万曆『漳州府志』卷一七、人物志下、国朝鄉賢伝。

(30) 「懿蹟紀」丁霸（二〇世）伝・丁楹已伝・丁一楠伝および丁長春伝（共に二二世）。

(31) 「懿蹟紀」丁晚香（二一世）伝。丁楹已がこの伝を考察し「蓋迂峰以道學爲吾族儒祖、世世守之。至于今獨爲蠹簡人家也」と記している。

明代の福建漳州府における宗族の形成

亀岡

(32) 「古譜」丁楹已「文峰丁氏宗史叙」崇禎五年（一六三二）、および「懿蹟紀」丁楹已「留耕記」下に対する丁世勲の考察。

(33) 丁楹已については、「懿蹟紀」丁楹已伝および何喬遠『鏡山全集』卷二三、奏疏「薦拳德行文章之士」。丁世勲については、「古譜」丁世勲「文峰丁氏宗史叙」順治十三年（一六五六）、「懿蹟紀」丁世勲伝。

(34) 弘治「八閩通志」卷五一、選舉、科第、漳州府および嘉靖「龍溪県志」卷七、選舉、宋郷貢。

(35) 「懿蹟紀」丁器伝「家世出宋進士丁知微・知幾府君之後。府君厚植農業、興鑿河圳、民至今利之。爲其族名徳、其郷惠愛」。

(36) 「懿蹟紀」丁知幾伝。隆慶・光緒『潮陽県志』に丁知幾の事蹟は見出されない。

(37) 王仲謙の漳州府知府就任年代については、弘治「八閩通志」と正徳『大明漳州府志』には洪武間とのみあり、詳細は不詳である。ただし、正徳『大明漳州府志』に、王仲謙の後任の知府李晟は洪武二十一年（一三八八）就任とあるため、洪武二十年頃には在任していたといえよう。後掲「漳州太守王公諱仲謙重修官港記」では、王仲謙が「洪武甲戌（二十七年、一三九四）」に漳州府知府に就任した

とされているが、これとは矛盾する。

(38) 「懿蹟紀」漳州太守王公諱仲謙重脩官港記「余以洪武甲戌由甯監出守於漳。時陳生子確、執吏役於府曹。一日、率鄉人楊敬和等、詣庭下言狀曰、漳之龍溪縣二十九三十都、大海環其東南、郡山固有西北。地形礪确凹凸、非高平廣陸。比、高燥者、每病於旱乾、卑窳〔沲〕者、常虞於鹹鹵。雖厚〔豐〕稔之歲、得失恒相半焉。昔、宋淳熙二年、有〔會〕里人進士丁知幾者、嘗〔爲〕簿潮陽邑。於本鄉欲興水利、以惠一方。乃率鄉人陳太柔等、〔狀〕赴福建提舉司、陳興水利狀。題之、下其事於郡邑募民。〔上〕自二十八都文甲下至二十九都石美〔尾〕、開地爲港一道。濶爲尺一十有八、深爲尺一十有六。以通柳營江淡水。凡若干里、於內堰〔堰〕石、爲陡門二首、以防旱潦。又爲小石橋十餘條〔所〕、橫臥港上、以通往來。每於農隙之時、官爲督脩〔修〕、故號曰官港。刻石立碑爲記。二都之田、無高下〔平〕遠邇、咸賴其灌溉〔焉〕。於今二百三十九年矣。越歷歲久、壅塞殆半、耕者病之。必藉於官、庶脩之功易集。予慨然曰、興水利、以便農事、予職之先務也。奚庸以煩劇辭。乃榜其民、以爲脩理之舉。仍令子確重其役、民樂於趨事。赴功期月、而知幾之舊址、視昔如新。其橋爲倍廣、耕者利、行者便焉。既功訖、復來請記。〔中略〕知幾其有功於民乎。因命子確

率鄉人脩其祠奠之、仍示鄉人、歲時加脩葺焉。厥後之享其利者、知其功之有自始云。〔註…〕内は嘉靖『龍溪県志』にのみ見えるもの、傍線部は嘉靖『龍溪県志』に見えないものである。本文引用部分の傍線も同様である。)

(39) 嘉靖『龍溪県志』卷三、祠祀、興利祠。陳太柔については不詳。

(40) 「懿蹟紀」丁自得伝および丁同寅伝。

(41) 嘉靖『龍溪県志』の編纂に携わり、序を執筆した弘治十五年(一五〇二)の進士林魁は、白石村に住み、「懿蹟紀」丁勁軒(一九世)伝には丁氏と交流があったと記されている。林魁については、万曆『漳州府志』卷一七、龍溪県、人物志下、国朝鄉賢伝。

(42) こうした理解については、Faure, op. cit., p.7.

(43) 「懿蹟紀」丁知微伝「兄弟合爲一則、君親二擔、俱無負。〔中略〕宜其爲前後房之祖」。

(44) 嘉靖『龍溪県志』卷一、地理、川、官港には「港長二十餘里」とあるが、「懿蹟紀」には「蔡紆三十餘里」、「首尾堰石爲陡門三首」と書かれている。

(45) 「懿蹟紀」丁確伝「迺出簿書與家中、經紀家事、課諸弟子」。

(46) 「懿蹟紀」丁砦伝。北溪と西溪は「図一」参照。両

者は江東附近で合流する。

- (47) 嘉靖『龍溪県志』巻一、地理、冶炼および万暦『漳州府志』巻五、漳州府、賦役志、財賦、鉄課。

- (48) 泉州府同安県の浯洲や汭洲で産出した塩や番貨を扱う商人の海船は、月港でこれらの貨物を小船に積み替えて北溪・西溪を遡り、上流の漳平県や龍巖県で販売していた。万暦『漳州府志』巻五、漳州府、賦役志、財賦、塩課および商税。

- (49) 「懿蹟紀」丁砦伝「他如謹權量以平物、減行利以裕人」。

- (50) 「懿蹟紀」丁器伝。福建の商品作物については、前田勝太郎「明清の福建における農家副業」『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』同記念会、一九六四年所収、三木聰「抗租と阻米——明末清初期の福建を中心として」同『明清福建農村社会の研究』北海道大学図書刊行会、二〇〇二年所収。

- (51) 村上衛「緒論」同『海の近代中国——福建人の活動とイギリス・清朝』名古屋大学出版会、二〇一三年所収、一七頁～二三頁。

- (52) 陳支平『民間文書与明清東南族商研究』北京・中華書局、二〇〇九年。

- (53) 「懿蹟紀」丁璫伝。

明代の福建漳州府における宗族の形成

亀岡

- (54) 「懿蹟紀」丁砦伝および「古譜」丁嘉言「文峰丁氏族譜叙」。

- (55) 「懿蹟紀」丁砦伝および「古譜」丁嘉言「文峰丁氏族譜叙」。なお、丁砦伝には「積税増祭田」とあり、ここでの「税」は、明代後半以降の漳州府において特徴的に見られる（一田三主制）に関連する佃租を指すと考えられる。

- 西村元照「清初の土地丈量について——土地台帳と隠田をめぐる国家と郷紳の対抗関係を基軸として」『東洋史研究』三三—三、一九七四年、藤井宏「初期一田兩主制の新研究——嘉靖「龍溪県志」の記載を中心として」『東方学』六九、一九八五年。

- (56) 「古譜」黄思永「江東丁氏世譜序」。

- (57) 「懿蹟紀」丁英開伝。崇禎『漳州府志』巻二八、坊里上、水利、丁尚舍港には「洋田」を灌漑したとある。洋田は、唐・宋頃より開発された浜海の広大な水田であり、明代には第一等地となっていた。前田勝太郎「明代中期以降の福建における水利機構の変貌について」『東方学』三三、一九六六年。

- (58) 「懿蹟紀」丁同寅伝。「官道」とは漳州府城東門より出て泉州府界に至る「東路」を指すと思われる。弘治「八閩通志」巻四二、公署、漳州府、文職公署。「図一」参照。

(60) 鄭振滿前掲『明清福建家族組織与社会変遷』一二六頁
 ～一二三頁。Sonyi, op. cit., pp.96-137. Liu, op. cit., p.119.
 華南における宗族發達の動態については、瀬川昌久「宗族
 發展のサイクルと地域性」同『中国社会の人類学——親族・
 家族からの展望』世界思想社、二〇〇四年所収。

(61) 鄭振滿前掲『明清福建家族組織与社会変遷』一二六頁
 および一二九頁。

(62) 「懿蹟紀」丁好(二三世)伝・丁錫靖(二五世)伝・
 丁上林(二七世)伝、「白石丁氏節考婦紀」丁景園(二三
 世、二四世丁世勲の父)妻林氏大娘伝、丁穹妻蔡氏宜娘伝、
 丁含妻車氏宝娘伝、丁向高妻陳氏要娘伝(共に二六世)、

丁以政(二七世)妻馮氏色娘伝。何れも明末～清乾隆頃の
 人物である。また、白石社に居住する楊氏一族の『白石楊
 氏家譜』『行実志』にも多数の事例が見える。

〔附記〕本稿の脱稿後に、蘇惠萃「従白石丁氏家族看宋代以
 来閩南海洋環境与家族發展」『瀋陽農業大学学報』(社会科学
 版)一七—四、二〇一五年に接した。本稿の内容と大きく関
 わるものであり、併せて参照されたい。

(藤女子大学非常勤講師)

First, the author confirms the fact that a certain number of Deng Clan bureaucrats managed to retain their appointments during the reign of Emperor An, then shows that the Emperor resisted this move by summoning bureaucrats opposed to the Deng Clan to his side, as evidenced by the large anti-Deng character of the Office of Palace Writers (Shangshu 尚書). Finally, the author shows that this trend continued even during Dowager Empress Yan's regency, when reaction arose to the deposing of the Heir Apparent, and the Yan Clan was unsuccessful in building friendly relations with bureaucrats, bringing about even heavier dependence upon the eunuchs.

The author concludes that accelerated participation by the eunuchs in politics during the reign of Emperor An and the regency of Dowager Empress Yan marked an important era of transition in the history of the Later Han Dynasty.

The Formation of Lineages in mid-Ming Period Zhangzhou, Fujian:
The Case of the Ding Lineage of Baishi Village, Longxi County

KAMEOKA Atsuko

This article focuses on the specific case of the Ding Lineage of Baishi 白石 Village, Longxi 龍溪 County, Zhangzhou 漳州 Prefecture, Fujian 福建 Province, in an attempt to understand the meaning of clan histories contained in lineage genealogies during the mid-Ming Period.

The author begins her investigation with a discussion of the ancestral shrine built by the Dings at Wenfengmuzhong 文峰畝中 during the 7th year of the mid-Ming Period's Zhengde Era (1512), which played an important function in maintaining lineage solidarity, symbolized by the memorialized merger between the Xiangxian Sublineage (Xiangxianfang 鄉賢房) of the descendants of Ding Zhiji 丁知幾, who during the Southern Song Period was awarded in his old age with the honorary title of *tezouming jinshi* 特奏名進士, and the Gongyuan Sublineage (Gongyuanfang 貢元房) of the descendants of Zhiji's older brother Ding Zhiwei 丁知微, who placed first in his local civil service examination (*gongyuan* 貢元).

Next, the author turns to the meaning of the above merger between the

two Ding sublineages. For Xiangxianfang, their social status in local society was already guaranteed by a stone inscription written by Wang Zhongqian 王仲謙, the chief executive of Zhangzhou Prefecture, lauding the accomplishments of Ding Zhiji and Xinglici 興利祠, a shrine commemorating Zhiji's contributions to society. On the other hand, Gongyuanfang had lagged behind Xiangxianfang and were embarking on upward social mobility only from the mid-Ming Period on. One way for the latter to guarantee higher social position was their enthusiastic promotion of a merger with Xiangxianfang, by reminding them that their ancestor was the older brother of theirs and conflating Ding Zhiwei's achievements with those of Ding Zhiji in the genealogical record. Consequently, the new Ding Lineage would claim origins based on the authority of the two brothers.

Finally the author examines narrative regarding the economic base of the Ding Lineage. The genealogical record tells us that the wealth earned by the Ding Lineage in its commercial activities was reinvested both in the Lineage as a whole and in local society. Through such stories of largess, the Lineage defended the legitimacy of the privileges it enjoyed in local society from an economic perspective. Here the founding ancestor Jiuchengshilang 九承事郎 and ancestors dating back to the Tang and Song Periods were brought up to add a long historical tradition to the economic activities of the Ding Lineage.

While praising its founding ancestor as a participant in the pacification and colonization of Zhangzhou by Tang Dynasty General Chen Yuanguang 陳元光, the narrative also established Jiuchengshilang as already residing in the region prior to the entry of General Chen, thus exploiting the authority of Chen to claim superiority over all the other lineages of Zhangzhou.

Farm Management and Non-Farm Employment in Modern Southern Manchuria: A Case Study from Liaoyang

KANNO Tomohiro

This article explores the characteristics of family farm management in modern southern Manchuria by looking at its relationship to non-farm employ-